



TITLE:

<批評・紹介>周藤吉之著「宋代經濟史研究」

AUTHOR(S):

佐竹, 靖彦

CITATION:

佐竹, 靖彦. <批評・紹介>周藤吉之著「宋代經濟史研究」. 東洋史研究 1962, 21(3): 337-343

ISSUE DATE:

1962-12-31

URL:

<https://doi.org/10.14989/152614>

RIGHT:

批評・紹介

宋代經濟史研究

周藤吉之著

昭和三十七年三月 東京 東大出版會
A5版 圖版二葉 本文八一六頁
索引一〇頁

目次

部一第	
一	南宋の農書とその性格
二	南宋稻作の地域性
三	南宋に於ける稻の種類と品種の地域性(新稿)
四	南宋の農鍛冶と農具の販賣(新稿)
五	南宋における麥作の獎勵と二毛作
六	南宋の苧麻布生産とその流通過程
七	宋代の圩田と莊園制
部二第	
八	南宋郷都の税制と土地所有
九	南唐・北宋の沿徽
部三第	
十	五代節度使の支配體制
十一	宋代州縣の職役と胥吏の發展(新稿)

氏が數年前に發表された論文集「中國土地制度史研究」は、宋代の土地所有制、とりわけ佃戸制の研究を深めることにより、特に宋以後中世史論者に大きな寄與をなしたが、既發表の論文八篇に新稿

三篇を加えて出版された本書は、また異つた角度から、宋代、殊に南宋時代の政治經濟史の研究に新分野をひらいたものといえる。

本書の内容は、氏の序によつても知られるように、上掲目次の如く、特に南宋の農業技術と農業經濟を扱つた第一部、税制研究の第二部、長大な新稿を入れて、五代宋の政治機構の問題を、職役と胥吏の體制を中心として追求した第三部、の三部分に分れる。既發表の論文については、その多くがすでにこゝ數年來の史學雜誌の「回顧と展望」でとりあげられており、「宋代研究文獻提要」でもその要約を見ることができるので、ここでは、新稿三篇を中心に逐次紹介し、最後に全般的な感想をのべることにしたい。

第一部の論文群は、第一篇の農書と勸農文とを扱つた論文をインロダクションとしており、第二・三・五篇の、南宋における稻と麥とを中心とする農業生産力の發展とその地域差とを追求した三部作が、その中心的位置をしめている。このうち、南宋の麥作と二毛作の發展の實情とその原因とを追求した第五篇が最初に發表されたもので、次いで發表された第二篇では、『南宋稻作の技術の地域差を、苗代仕立から刈入れまでの一々の技術について考えると、兩浙ことに浙西と、廣南東西や荊湖南北のような後進地帯とでは大きな差異があり、それに應じて、收穫量においても、一畝當り、浙西三・二・五石、浙東二石、江東二・一・五石、荊湖南北一・五―一石、福建二石(但し兩收の地で)と、標準的生產高に段階があつた。』と論じられている。

第三篇の新稿「南宋に於ける稻の種類と品種の地域性」は、この前二論文の論旨を補い、發展させるために書かれたもので、その主

要眼目は、Ⅰ南宋における稻の種類とその特性 Ⅱ稻の各種類の作付状態の地域差と、その社會經濟的意味 Ⅲ南宋における生産力の發展と、稻の新品種の形成との關係、という三點を明らかにすることにある。氏の所論を要約すると次の如くである。

『南宋時代の稻の種類を、その種子の黏の強弱を中心に分類すると、糯(秈)・粳(秈)・秈(山禾)・占城、の四種に分れる。この四種の稻の特性は次表の如くである。(この表は、氏の論述により筆者がまとめたもの) この四種のうち、特に糯米は、酒の原料として使われたため、殊に臨安のように酒務を多くもつた大都市の近郊で多く作られ、ある地方では、産米額の一割近くに達し、近郊作

諸特性	種類			
	糯	粳	秈	占
黏度	++	++	--	--
粒の大きさ	++	+	--	--
早熟度	--	--	+	+
肥料必要度	++	+	--	--
水分必要度	++	+	--	--
保存可能度	?	+	--	--
價格	++	+	--	--
市場流通度	+	--	+	+

物的性格をもつていた。

一般に食米と意識された他の三種のうち粳米は、この表からも知れるように最も高級であつて、上

戸の主食であり、粳米を産する地方では、秋税・和籾・私租ともにこれを納入するのが一般であり、事情により他の米の納入

を許す時には、一割もしくはそれ以上の割増が要求された。これらの稻を早晩の點からみると、晩熟米の栽培は、浙西では産米額の半ばをこえ、浙東では半ばちかく、江東西・福建がこれにつき、荊湖南北では、ほとんど植えられなかつたらしい。すなわち、晩熟米

は、最も農業生産力の高かつた揚子江デルタ地帯を中心に作られたが、これは恐らく前表の四種の分類、殊に、粳米と、秈、占城稻との差異に關係のある現象であらう。品種については、地方志の記事によると、稻の品種は、前代に比して激増し、一地方で30種程度に達する。これは宋代の農業生産力の上昇をあらわすが、元明では再び淘汰された。』

この論文は、前二論文とともに、從來漠然と考えられていたにすぎない農業技術の地方差と、揚子江デルタ地帯の先進性を具體的に示したものとして大きな意義をもつ。ただここで、本論文の史料が、大部分地方志と文集であり、その性質上、特定の地點の状態のみを表しているものが多いことが氣にかかる。一路にかなり不規則に分布した數個の史料しか發見しえない時、これらの史料の示している個々の状態を總合かつ平均して、その地方全體の状態を考えるのは、かなり危険ではないだろうか。例えば、浙東の温州、台州等の史料を浙東路全體の事情を示すものと斷定してよいであらうか。

第四篇「南宋の農鍛冶と農具の販賣」(新稿)

これも第一部に屬し、南宋の農業生産力の發展と密切に關連した現象を扱つたものとして、前記三部作の間に挿入されているが、南宋の手工業と、その製品の流通過程を考えたものとして、形式的には、第六篇の苧麻布を扱つた論文と對比できる。本篇は、主として兩浙・江東・淮南を舞臺に、農鍛冶について、Ⅰその經營状態と製品流通 Ⅱ莊園制度との關係 Ⅲ國家權力との關係、の三點を明らかにしようとしたものであり、次のように要約できよう。

『當時の農鍛冶は多く草市に住み、大部分は農業を兼營していた

が、專業としているものもあり、淮南のように宋金の戦場となり、土地が荒廢し、農具や武具が大量に要求された所では、政府も農具の商税を免除し、商人が多く往來したため、一年の間に大きな鐵冶の主となる農鍛冶もあつた。小さな農鍛冶は、一般に大きく國家權力の強制をうけ、廣範圍にわたる和雇強雇によつて、官營工場である作院甲局に於て、相當低劣な條件で武具製作に従事させられ、また官僚上戸の家で雇傭された。大經營の鐵冶では、管理人・鐵匠作頭の體制がとられ、作頭には、群盜を使用してこれにあて、その下で奴隸的境遇にある使用人が使用され、當時の邊境の圩田の内部構造に近似した形をとる。』以上、その主張されるところは妥當と思われるが、傍點の部分については、史料的に少々疑問があるようである。氏は雙溪文集の官營工場での勞働を示す史料、「境内匠人、迭互用工、……又況終日鍛鍊、不得休息、日以二副爲限、比之私家用工、極爲勞苦、」の中の、「私家用工」ということばを、私家（「官僚上戸」）が、工（人）を用いると解して、傍點部の唯一の史料としておられるが、この私家というコトバは、本書P.288の私家造酒と同様の用法であり、用工は、この史料の中に見える迭互用工と同じ用法であり、自動詞と考えられ、自家勞働の意味と考えるべきではないか。常識的に、官僚上戸が鐵鍛冶を雇傭することは當然あつたと思われるが、そのためには、更に正確かつ具體的な雇傭状態を示す史料が必要と思える。氏はまた大規模な鐵冶の内部構造が、管理人・作頭の體制と盜賊の雇傭という點で、當時の圩田や園田の中の莊園のそれと近似していると説かれるが、管理人とか組頭とかいうものはいわば社會學的な範疇であり、具體的な内容の面からの

規定にかける點がややあるのではないか。

第十一篇「宋代州縣の職役と胥吏の發展」（新稿）これは百六十頁に及ぶ雄篇であり、宋代の吏役の機構の制度と性格を扱つたものである。主に科擧出身者により典型的に形づくられた官人のピラミッドのうらには、これに影の如くそう吏人がある。吏人は一般に①官の行なはずの事務を官の手足として、官と密切に結びつきながら代行し、②無給でしかも希望者採用である、という二點にその特質をまとめうるが、更に③官僚機構のどこにおかれるか——中央の吏と州吏と縣吏、④稅役徵訟等の書類を扱うものとするやないもの、といった分類が可能である。本稿は⑤の分類をも頭におきながら、⑥のうちの州吏と縣吏を扱っている。役人は一般に①官吏の機構の下に、②無給で差充されたものと考えられるが、更に、③どこで役に服するか——衙前等の州役、弓手等の縣役、里正耆戸長等の鄉役、④單なる勞働力としての性格の強い力役的職役と、何らかの形で（殊に鄉村内で）現行體制の發揮と維持に責任をもつ典型的職役、といった分類ができる。このうちもつとも重要であると思われるのは、典型的職役であつて鄉役である里正耆戸長、或は保正副等であるが、これらはここでは扱われない。氏の意圖は南宋に至つて典型的に成立した胥吏の體制を宋初にむけてさかのぼるにつれて、それが職役的なものになることを示して、唐宋變革の性格をこの面から明らかにしようという點にあると思われる、兩宋を通じて胥吏化しなかつた職役は一應問題外とされているようである。氏自身の序説と結語とを要約すれば、本稿の内容及意圖は、Ⅰこの吏役機構の五代との關連、Ⅱその宋代での變質、Ⅲ宋

初では職役的であり、熙寧元豐の改革後、殊に南宋では「官無封建、吏有封建」の公人世界を形成、Ⅲ胥吏組織の性格規定、Ⅱ莊園の幹人の國家版、の三點を明らかにしようとしたものであろう。

實際に論文を読むと、前半（第二章）で、宋代の州縣の胥吏と衙前の姿が、あくまで制度史的に逐條的に説明され、主として差役から募役への變化をポイントとして、職役制度から胥吏制度への變化が扱われ、後半（第三章）で、南宋州縣の胥吏の性格が、その官吏或は城居の攪納人との私的な結託による不正行爲という面から分析されている。最初に第二章、『ここであつかう吏役は、(1)州に屬して各種場庫務と漕運を司どる衙前、(2)州縣衙内で書類をあつかう人吏、(3)力役的な州の散從官と縣の手力、州の院虞候と縣の弓手、(4)兩稅納入場の斗子や、商稅徵收場の欄頭の如く、稅金納入の際の現場勞働に當るもの、の四グループに分けられる。』(1)の衙前については、役にあてられる際の保證財産の多寡と役の重さ（その役の重さを示す分數）との關係、分數そのものに關する新事實の發見等についての論述が目をはく。衙前の胥吏化については、『すでに熙寧の募役法の直前には、四川では大部分、淮南・兩浙では2/3以上、その他の路分でも半分以上は長名衙前であつたが、募役法が施行され、從來これらの酬獎にあてられていた酒務・鹽井・河渡などが官營となり、官僚機構が整備されると、長名衙前も急速にへり、同時に胥吏化した。』ここでは、南宋での衙前の胥吏的性格を示す史料も示される。(2)の州縣の人吏は胥吏の中核的存在であるが、從來これを正面から扱った論考はなかつた。氏の論證は次の如くである。『州縣の人吏は、それぞれ、正名の吏と見習いにあたる貼司と

に分れる。正名の吏の中にもかなりの階層があり、このことは特に州の場合に重要である。衙前の場合と同様に四川・兩浙では、この位置は役得の多いものとして、宋初から争つて投名され、世襲的であつたが、河北三路の場合は、仁宗朝まで郷差によつていた。募役法も差役法も人吏にはあまり關係がなかつた。』ここで氏が三路の特殊性を蘇轍のコトバをそのままうけて、民が書算に熟していなかつたからという點からのみ考えられるのは幾分イージーゴーイングな感じがする。ついでながら、司吏Ⅱ典貼Ⅱ貼司（P179）という解釋はどうして成立するのであろうか。(3)について『州の散從官と縣の手力は、官人の使役に服し、官員の送迎、草刈り、薪あつめにも當つたようで、兩宋を通じて、租稅の督促にも當つた。州の院虞候は、司理院と州院の獄訟の役にあてられた。縣でこれに對應するのは弓手であるが、弓手は一方では縣尉の下で捕盜にあたり、一方では獄子にあたる。』獄子Ⅱ弓手説について問題になるのは、弓手についての「專提盜賊、不許別有差使」という規定、及び氏も引かれている州縣提綱の「手力が獄子になる」という記事の存在である。獄子・弓手説を支える史料が地方志で、しかも重祿を與えて、とあることから見ると、これは獄子の腐敗を防ぐための臨時措置とも考えうる。院虞候については、三山志によると、元豐以後、百二十人のうち、十八人だけが獄子（節級を含む）となつていたようであるが、その他のものは具體的にどのように考えたとよいだろうか。(4)について、『斗子・庫子・措子・秤子・揀子は、州・縣共におかれ、監官の下で、兩稅和糴等の際の現物納入の勞働事務を行ない、納入物の管理にも關係した。』またこの項では扱われていない

が、『この監官は轉運使や州が任命するが、實際には州吏の手になることが多く、その下の斗子・庫子等も、州吏の手で決定された。』商稅徵收場の欄頭は、『募役法後は投名で給錢をうけず、南宋では一欄頭の下に數名の家人がいて、商業發達のガンとなつた。』以上概略を示した第二章の行論の中で、氏は問題點のⅠ、Ⅱを究明しようとされたらしい。Ⅰについては、第十篇の「五代節度使の支配體制」と讀みあわせるなら、名稱乃至制度の連續と變化については、史料的に十二分に納得できるが、一つの權力の機構が、五代と宋の間でどのように變質し、それがどのような意味をもつたという觀點を更に明確に出して欲しいところである。Ⅱについても、實際に職役↓胥吏の方向が明らかになつてゐるのは荷前に止り、手力・欄頭にもその傾向が認められるとしても、氏のこのテーゼが全體的に實證しつくされていまいらみがある。次にこの章全般にわたつての若干の問題點を指摘しておく。吏の制度の研究では、官の制度の研究から逆に推定できることがあるが、ここでも、州院と使院の關係、稅場と倉庫との關係、場庫の監官の制度的位置等の問題を追求すれば、これらに所屬する吏の性格も更に明らかとなる。豪族と吏役の關係については、氏は「宋代莊園制の發達」（『中國土地制度史研究』所收）において、浙西の豪貴は、多く莊田の幹人に巡尉司をあて、弓手をつかつて私租の缺滞を追求したことを明らかにしておられるが、北宋末以來豪族一等戸が弓手・手力にあてられ、しかも代役が認められたということ、このような情況との關係は考えられないであらうか。又從來胥吏の出職が問題となるが、氏が「吏而帶行陪官」とカタガキの問題である史料を示されたのも

興味がある。又氏のいわゆる犯罪人の充吏は、「累經斷停吏」のゴロツキの活躍と關係させて把えるべきではないか。

第三章「南宋州縣の胥吏」は、胥吏の性格を「不正」というポイントから把えたもので、(1)「知州と結んだ州吏の不正」と(2)「攬納人と結んだ兩稅納入場や和糶場の吏の不正」という二點に問題がしぼられている。實際に舊中國の政治社會では、「滅公奉私」が逆説的に一種のモラルであつたようであり、(1)について氏の提出された「朱文公文集卷十八・十九」の興味ある史料によると、『知台州唐仲友は州吏と私的に結託して、公使庫の二萬八千貫をゴマかして、ふところに入れ、或は知人親戚乃至土地の官人に送る等々の多くの不正を行つてゐた。』氏のコトバでこの狀態を總括すると、『唐仲友の如きは、南宋でも相當の儒者であるから、多少の節度はあつたと思える。これからおして、南宋州縣では、これほどまでではないにしても、ある程度これに似た例は多かつたと思える。』この總括は少々モタモタしているが、儒者であるから汚職はしないというよりは、汚職をしたから儒者でありえたという方向で考えた方がよいのではないか。「官庫の金をゴマかして、自らの或は古典の書を出版し、錢物と共に知識人に配つた」ようなことが、彼の學者としての名譽を作つてゐる重要な要素ではないか。また彼らにそれだけの不正行爲を可能にさせた要件を分析すれば、このような事件が他州縣でも起つてゐたことが明らかにならう。

次に胥吏（斗子・庫子等）・豪族・攬納人の三者の結びつきについて、『租稅の請負い納入に當る攬納人は、胥吏豪族と密切なつながりを持ち、自らもそのようなものであつたり、城居の大商人であ

つたりした。』と三者の不正行爲とその基盤が明らかにされる。こうしてこの章は「吏の不正行爲」を中心に問題が把握されるが、「不正」を單に理念的制度からの逸脱という點から捉える以上の、「不正」の概念に對する検討が必要となつてくるのではないかと思われる。又氏がここで、直接に鄉村と關係をもつ縣衙の人吏の不正を問題とされなかつたのはどういふわけであろうか。胥吏の問題は、1 それ自身國家權力の機構の一部としての面、2 社會集團としての面、3 鄉村内の階級關係とのつながり、等の面から把握することができよう。1 では胥吏機構と人民との關係、その効率の問題、官機構と吏機構の性格の差と關連等々、2 では、そのギルドの性格、知識人的性格、中央の吏と州の吏と縣の吏との性格の差異と社會的つながり、官集團と吏集團、吏の出自の問題等々、3 では豪族の特權維持と胥吏、階級關係の維持に對して胥吏のもつ役割等々、が問題とならう。これらの問題の多くは氏も本稿の中でとりあつておられるが、氏の主な關心が制度史にあるためか、又方法論を表にださぬという氏の慎重な態度のためか、本稿からこれらの問題に對する氏の見解を十分にくみとることは筆者にはできなかった。

ところで、本書全體を通してみると、各論文の問題設定と、その全論文を通してテーマとの關連を示す序説に當るものがないことが、本書の理解を困難にさせているように思える。各論文は全般的に起承轉結のはつきりせぬ獨特のスタイルがとられており、これは一刀兩斷式の安易な方法をとらない、氏の良心的な實證態度とも結びついているのではあろうが、農業經濟・土地問題に對する氏の一貫した強烈な問題意識と、史料集的性格さえ時には感じられる地味

な制度史的論文形式との奇妙な統一は、實に多くの重要な事實を明らかにしながら、それを十分に理解させにくいのは残念である。

最後に結びにかえて、(1) 前著（中國土地制度史研究）とのつながり、特に莊園制度の問題について、(2) 斷代史的方法について、の二點を中心に、自分なりに本書全體の問題をひろつてみたい。(1) については、前著が莊園制度一般の追求をその中心課題としているのに比すると、本書では、このテーマはつきり表には出されていない。表面に出してこのテーマを扱っているのは、第二・七篇の兩論文である。第二篇「南宋の稻作の地域性」では、農業技術の保存と進歩の核として莊園制を扱い、第七篇「宋代の圩田と莊園制」では、大規模な勞働力を集中して形成された土地開發の場での莊園制度が考察されている。唐宋變革の性格規定をめぐる、莊園が社會の基本的な生産關係の成立する場であるか否かという點が重要なポイントとならうが、この兩論文のように特殊化した觀點からの莊園制度の研究により、このような莊園とそれ以外の場所での生産關係との對比についても、新しい手がかりがつかめるように思える。(2) については、「宋代、殊に南宋代の農業生産力の發展と社會の發展」というのが、この論文集全體をおおう大きなテーマであろうが、その發展のもつ意味を歴史的に確認するという方向が十分に表面にまであらわれていないという感がある。たとえば半麻布生産・鐵鍛冶・管理人による莊園や鐵冶の統制、或は附加税（沿徵）といったものは、恐らくいづれの時代にも見られる現象であらう。これらの現象が宋代の社會にどのように結びついて、その歴史的特質を形成したのかということが重要であらう。先の圩田の問題にして

も、それが元・明時代とどのようにその姿をかえ、同時にその意義をかえてゆくかについての簡単な見通しがほしいし、農鍛治等についても殊に前代との存在形態の差を示してほしい。氏がもしこのような點を大膽に示しておられたら、本書の意義が更に明確に理解されたらと思う。

(佐竹 靖彦)

清水博士
追悼記念 明代史論叢

昭和三十七年六月 東京
大安 A5版 七六四頁

明代史の研究に志したもので清水泰次博士の著書や論文に導かれなかつたものは殆んどないといつていいのではなからうか。酒井忠夫、中山八郎、星斌夫、山根幸夫各氏をはじめ、明代史の研究者を中心とする多数の方々の協力によつて、ここに総頁數八百に垂々んとする本論叢が刊行された。序文によると本書は、最初博士の古稀の壽を御祝いすべく計畫された論文集であつたが、それが博士の急逝により一轉して追悼記念論文集となつたことは誠に悲しむべく、残念なことといわなければならない。と同時に、この論文集に寄せられた執筆者の陣容、その内容からして博士の學恩の深さ、大きさを改めて感じさせられるのである。序文にも述べられているように、論叢の執筆者たちは直接に博士の指導を受けた門弟や、限られた範圍の知人たちによつて構成されてはいない、むしろいわば學閥といったものは無視して、明代史の研究途上大なり小なり博士の研

究より影響を受けた人達が、何らかの形でその學恩に感謝するといふ、純粹に學問的な氣持から執筆寄稿されたものである。誠に博士の追悼記念論文集にふさわしい性質内容のものであり、從來のこの種の論叢に對して一つの新しい型を示したものと云うことができよう。

さて、本論叢の内容紹介に移るが、ここに收められた二十一篇の論文の個々の内容については、「大安」本年九月號に寄せられた山根氏の紹介文中に要約されているのでそれを見ていただくことにして、ここではただ論文の論題と執筆者名を掲げるに止めることを許していただきたい。

皇明祖訓の成立……………	石原道博
再び「嘉靖朝の大體問題の發端」に就いて……………	中山八郎
明代における儒學教官の考課について……………	五十嵐正一
一條鞭法の形成について……………	栗林宣夫
華北の土地所有と一條鞭法……………	片岡芝子
明代の椿朋銀について……………	谷光隆
『山東經會錄』について……………	岩見宏
明代華北における役法の特質……………	山根幸夫
明代における邊餉問題の一側面……………	
——京運年例銀について——……………	寺田隆信
明代北邊の白蓮教とその活動……………	野口鐵郎
初期滿洲八旗の成立過程について……………	
——明代建州女直の軍制——……………	三田村泰助
明代山人考……………	鈴木正